特別
イ 4
3163
106(2)

貴
14
3163
106(2)

三緑山人

糸絡やうやう濃れなんとさまざまとめてる咲よりあるふ
春をとどめるしるしは春は門ちりすぎ事や杜若とて
りたる春。連歌よりは春やや杜の若葉をとり利て春
傍んちふふ春なり。八橋をめぐりしうずか
毎うれ名ふをとり出するぐうふものくぐいやう沼
上野よりは可保夜沼とうく春なり

○才五十七　春は花の
花のち歌事を歌うせしかふ春はさうはは春はいよりう
是三月盡は新春なり。春はさうはとうあぐ。三月
尽は花鳥よりおけあり。三月晦日をさみす

○才五十八　春玉掛う
春玉掛うち志げたうう布を打うちえうとうゆる郭

此上句よくかなへ置と後がたくあやしといふ
事なりせし其比をぬ附ハ上五を拵へかへて置
○第五十九　氷室の名こそ例
麦の目を添へたる一里松の寄是や氷室の名こそ例なれ
松の寄は山城や一里は渡しの子にあらずや又阿さ
例にもあらず。氷室といふ事や其ところそと
さとなまさひろきの紅葉を尺と例ていふ所
なるにて真清水やと云　云
○第六十　鳴ぬく秋
胡すて文様の添し第八鳴つく縄ひしめや志ぬらん
秋になれば山中に例するこのかくれ居て鳴の
ま手をしてくるまで猿康を待と道行人に知する

あいだを鳴ふくといふて此例
○第六十一　妻とこれる
ちをすりし志んくの山よりしね手て妻とこれるさか廉の妻
志んくの山図いまこ勘へも想あ此首をものれんく
よみこしむ歌志れむともみて読べし。妻とこの
かる時ハ妻を待とてまつる事この鳴のすねをとく
のつるといふ所なり
○第六十二　明石のあさらか
浦風に波やれるらんのすゞしなかしありしの絹の花
此綺に例此赤樫を明石に見るる例ハあるべく
ぞ是ハ薬に人磨の住ある朝霧の歌のおもしろさ
まりくふめるとみえし例。今此世にハさやうの事

ハなりぬ儀なり。猶此ゟ船ゟみちくさ物なるふ此
年ゟ月て明ゟをよまりんパこうた重変なる事
ふ作る

○才六十三　せてこれ中道

引ゟてせてこれ中ゟ霧ゟふく高くこ移る重月の弱
此勢田此ゟ出ゟ八長此ゟ中ゟ八中の事や
かんなるてゟ巻だとゟ別まざゟうす抱く。凡約遠ふ
ハあ上坂をのこよみるゟ此作佐名ゟさて
て富田をとゟ別出せり。是をゟふ〜て来る重引
まゟる駒此順ゟをさく〜紀さバ江別此中。京ちか
よゟふを仏無てゟこくゟむ移るべよを見成
べし。宗祇云せてこれ中ゟハ富田ハ橋などふく

ゟ為ゟ為し。西素ゟ来ふゟあるをこゟ中道と
ハいふべゟれ。で一命あり鎌倉此海ゟのせてこなを
ゟ出ゟるべし。出語とふ事詩をみ〜ゟり
○才六十四　廉此者をいくとふ詫奇
昨日ゟ交人ゟ此ゟ出さい廉を名こゟ里するをさの乱さう
此事よゟ此かゟ八出とふ事なり
○才六十五　ひゟの浦
天作ゟ毎此ゟ神ゟ為ゟ作ゟ
ひゟのう浦。西ハまぎたりひゟの浦をけてさゟれと
名てゟみやうなる此。此ゟ〜ずゟ。掛りゟの道を
ゟ別と為ゟよゟ名ふ
○才六十六　小作ゟうみ

白鳥乃警坂やまを越て小篠ゝみを書あり。こゝ里
山城ハ名ゆへ。勝重ハ名ゆへ。ハちをかの名
を。

○第六十七　ゝくたち

ゝくあちハ再ゝ名をたずぬ。秋ハ清き川原ハ風や吹らん
ゝくあちハ夜ハふる事ゝ。ぐちハ名へ降
古今ハ　ちくハ系再　ねり法を書れ。れをかゝ
ゝをゝちゝ我ちゝ利ゝをどちゝ。ふかゝ。
よねゝるとゝみゝくなゝ。ゝのしゝをなゝ。ゝゝある時
ゝくたちといひてゝばかハゝれちゝゝゝべし
ちゝをゝれ刻をゝのゝゝゝみゝゝゝゝ書く
ゝゝれ名を名を。ちゝひ大事ゝ。

文徳川系ハ大和ちゝ名ゆ利。一説ゝ名ゆはゝ
あらず。ハちゝゝを秋ちゝ生ゝる川系ゝゝ
をいねゝと云云。但彼ゝゝゝゝ。
ゝくゝゝれ刻数ゝ出ざる間ハと利男ゝ。

○第六十八　ちゝぬりれ鈴

ちゝぬ里ハ於を拾ちゝいま世ゝゝ合てゝゝ海ゝゝの奮
ちゝぬ里ハ於ハ一ろくぬりゝる於ゝ拾ゝ。ハ
鈴鹿と半ゝ拾ゝくとなる書あり。ハ里世ゝ山城
やゝちゝ海ハまゝの書ゝの奮ゝゝゝ
ゝゝとゝゝハまゝゝ海ゝあゝず。肩ゝゝ里白ゝ奮
をゝゝとゝゝ里一年に書ゝゝ里とゝり。ちゝくゝゝ
ゝゝる於ゝ

○第六十九　いとなみとる

門松をゆとふみとるこちたくふる春のくさふとりやなめん

いとふこと立るこうらへ立る色やぴとなみハ雅宣や。

かど出ふりぞらす。何事を問へ佐くはひうら

らへ作るをいはなり

○第七十　あき刑をせるく

雑俳ことの刑場やあるかんあき刑をせるてうら俗

せなてハせでるりなのハ体なやせいでといふあり

但せるん如べーせるんハせちと立事でみを得元

○第七十一　かるねる刑

おとるしおぬ人ちるまるやねるより被露を旅乃移元

祈られぬまるか。古ゐ人どのこちをとるるとあり。

るや祈る刑ハ苅よハあらを備ちるなり

○第七十二　なそやうちも

なぜ屋二ハ幾分ハうれ白山りあらは書の掛り佐るる武

ふぞやハなんぞやありどりてる紂ごまくこれハや

○第七十三　拵りてれ衣

若ごとめ拵りてれ衣をこうちてく祈るぞまる万代とふ

拵りてれ衣とハ紫文たる紋などある衣をいふ。

ゆりてこのひをれ数なるべーこれハ切なりる色通

なりちてハ拵ふちてといふあり。ちゆ

ちやおさまるちをありこれを拵りこの衣を御

幣たいふこと里調るうろ毛。神職ち人りく

りを易べーとあるかにつるぞ。

此衣ハ四へいたるべし

越前守藤原仲實

○第七十四　猶る雲を風

猶まつ人なる雲さ風乃雲つきさて雲立さぬと知られぬる

猶る雲さハ猶るさ風や吹出ゆるさ風とハ偽よ

少ゆるなり。雲さ入て風流乃羽ぐくやうれ乃ハ

里あ。をのつうつ去りて住ぐ雲れる古人れうえ

孫乃ゆゑなる事。今の世れをのく及ふにあらぬるこの

○第七十五　玉たくさ

玉たくさ春れ狗子にゆをうて玉のを去くれ乃べくと

是ハ家持れ事をとれるやゆ玉たくさハ松乃昊乃や

世上ふ　狗雲れたつは今日の事。志賀寺れ上人

れうこと乃ハあやまれ乃ゆ。家持乃作也

○第七十六　いづくにて

谷水をせくこるれよいうて左なう狗ふ国れ猶まふて左り

いうこほ又十れ里と云。又十里とう雲たこと小

てハいそうとハ左るまを。里ハ幣里ゆ。是ハな

りろれ水口の邪を雲ます事。いうこそうす

へ下つる邪ぬれ乃ゆ。ゆゆ代の影を

れ乃ゆ。ハうれ本事を去りてハ十分をあき

をのなるよう乃ゆ。歩去る作る

○第七十七　花咲れ

雲雀ゆ。国花咲れ乃ゆ。ゆ咲る藍をぞ

是ハ藍れ事乃ゆ。すこれとゆ影をとりてやうの

中ごろ出でたりしかど、今はまぬるものや。古人をせんとて、今死ゆくよ。或は雲井の雲或は花火は花火の糸なぎ、くものいとをとりかけて余情とし。京色のたかりろきを尋ねうまれ侍る。此ごろ本新めて雲井花火糸などを憎んハくるかぐ。ぞ此の俗例として蓋の器よこと、なる為者さの別れ名ふ花なとを今の世人ハたまぬ事。古人ハ俗いとをぬれば器のかけたるものをもちゐ智いぬ名ふをを自出ひとりあくるやうふことを忘れ侍り。遂て道ゆ南ぶるとりなるべし。末代よハこれぬのふををたちされば、あさらしを例なきよ名ふ京物などをとり添る事ハせぬと

とも。第事ハ渡るべし。蓋ふりぶるへりすゝ。又花火ハ烽火くゝ。ぞう烽火をあ事ふ方くふあれば花火ばりらいばくのくふとを色うて。花を春月ばくく花火ばと古ものよ出ふく候ばれて通ぶ。

○第七十八　紫式部　波

紫式部ゝを波ゝすとゝみ粉くる色里式部菊花咲ふくり是ハ人丸ハ　多粕浦や底ゝ人句ふ蔦波をうぶして粕うんゝぬ人のゝめ。ゝをかゝめてゝうこ結へり。越中の多粕浦や。駿河の田子ふハ義をゝうまゝぶ。ゝ波とハちふふふふゝすする波ゝ。又ゝうぶゝ波をゝうふ天照太神乃祈倍ふるゝ。ぶれゝこの波

ハ管絃いまだきてゝぞ。此伸實此始てちみ絃へると
みえゝり。風流なる翁と。ちゝ彼と なくたぶの彼
とゝまんふ。此能をあれど雅なるべし。おゆゝる
ふりてハ為男ぶ翁うゝて作き

○第七十九　ちらく

御のむ乃ちらくにさきる名書ハ賊るか知まぞ月よ放なる
ちらくハ白よゝ。ちらくうゝみ移るり ちらくうゝみ移るふ
どくいつる梅すき翁ゝ。ちゝしとゝふ翁ハ移すむべう
らぎるよし 定家ロ作らきし。ちらくハ創のかふ
てちゝを実ふく作きハ為男ぶよゝ

○第八十　神山乃園

神山乃その蓑をつゝ刈りて七日ゝみあれよるぶし作るふ

園とハ第乃此おわきてあをいゆ。人家此蔵の類る
ふりて連ゝうゝハ居ふゝ男るゝ。作此おわを
ふをハ作荒梅の打ふふ。ふをハ梅ゝちの などゝ
むゝ此その蓑をゝぶ 実義山此国のあゝ此おわを
ふをゝふ。神山乃園とて作し定るゝふ
みハあゝ此る色し。ゝ刈ふぶゝ園といゆ能りて
神山をゝまむ此能をありて移へなるふゝふゝハゝる
しゝゝ刈りてハ鎌のゝ子なり物を作ふゝ作ぶる
を云。蓑をゝゝるとハ脇ふ。翁ふりぶらす
仍合るふりてゝゝゝるとゝ云翁為男らるべゝ。但
うゝ刈りてとゝふ事なりゝ作きゝゆとなるゝ舞
○第八十一　ゆふ作く

是則乃山田の庵ハめに佗しきとされ拾く是ハさらかりけり
めに佗しくといふ詞俗言にあらず。是男らるべし。又此
哥ハ菖蒲草といふ題にて折句によそべし。あやめ草
う剣男ひて各別の事を讀でこそ題によみたる哥也
事是本よりの諸書なし。仍未生覚悟のするられをしるぞ

○第八十二　三井の清水

影とみれば尾の白波ぞかけるに三井の清水を結ぶ手の雫に
三井の清水江別なり。三代の帝の御うぶ湯を汲し
水なれば三井といへり。此寺の題ハ泉や。泉といふ
題にハからの泉し清水を讀べし。是ハ三井といふ
寺に付儀するや。庭井の清水とあるを能べし

○第八十三　舟とよみ

渡し守舟どくらくこゝまで七夕の年にあふ夜ハしづごゝろのこ
舟とくらくハ舟を急げと云の利。又急くとゆと通ずる也
へるの利。渡しと星に精をいだして織女を渡せとぞ。
俾鶴の諸にハひこぼしのとりもやうなれば。さても
らしの文にハ織女の方より渡るといへり。又とよみを
ハ大やうなる事をするならひそうに渡しまれと船渡
に心をし拾る儀なりと云云。但とよみハ誤で舟を
とゆといふ事能へし。船とこそハ舟の儀にして
拾うね筆く

○第八十四　いさなとり

いさなみよ今をみらん也扇花志なるの飛あく時をなし
いさなこそハいさしめとあるぞといへりなどささ又書

おもはぬ者にうばいたりめハかりそめなりとハいへ
ども。卒尓とかくとさたしかれハ用なりとも
みさをとしるべしとかの。古今にいさゝかハ時ハ過
月にめるとも耕作の道ハ人のそのをとあり。いさ
なとハ事大事のの秘説あれとこれ云のせを
○才八十四　秋はてゝ
野毎にそゝろびゝ事なる蕎麦秋のさるハ人えぬ成り
農ハ家を春ゝ事をもとをるを山ゝをもとをるを月前也。
ハりしなゝ初なり
○才八十六　春ハ十
みさをなりなれの繰ゝ春ハかくや晴まるみえぬ雲ハ
うさやをハ。神田公田なとをとる者也。春のと

中ハ深さなり。こゝ事書みゝ山の影也。こゝをバ屋ゝをやう
なれ也。人まれなる羽さとハ用らるべ
○才八十七　かをハ物ハ時
春ハ乃閑の秋なるゝ引なるハこゝやを月ハ上げ物ハ乃弱
重月ハ名ハ名。月の新といひ春く麻毛をとあり
物ハ時ハ名なるなり。駿ハ子なり閑乃秋
間の月ハ時ハこゝ名ハ
つゝをとる春の利
○才八十八　出とハ毎年ハ日ゝ〜をとめる事
山里ハ春ハ山里寒り春ハ乃吹々春ハ日ゝ〜乃変
ゝ里川院姫乃百首ハ秋の郭ハ出の春ハ仲実
一人此をとあり利。ゝやうハ流例をとゝ〜ハ他

めちらさを雑じりて能をくらものかるがゆへよ
うみたる次
○第八十九　水はけみるこ
泉川みはけみるごの乃ゆ
泉川ハ山城よりあり。みれ三輪田とう者り。梅のみを
云なり。この字まごるべしみるごれこのやハ水なり。
これとりつを名はけ毛なり。水のたやをふを云なり。
堰乃ゆくくハ堰ふれを堰こうの利事なれしうき
ぢと更めぢまよ及ぶこハるごかするといふ初。
水はけこ水よるごくまりてあぐれを深をふよ業薪ふ
どを入毛をふ法者とハ云やをはてうなるあふ
あつまる奥をくるべきるなり。宗祇云みるこハ水

はけるるあなり
○第九十　法夜寒こ
法夜さ寒こ今ぢはけに実世ぢ萩はけれをふはけれるなり
法ことハ夜と事ありふはけ儀なしあく夜と
いはの事こ世ふこ事ふこ初なりこ重用へ
○第九十一　李川そね
雑波江乃なこはけ李川さふ乱あしはけ波間よ重てこゆん
李川そねハ李新東ぐあこへ李はるよ云ふ重
法さふぐ利てまふれあをこ川そふこいふ乃ぐ川
はけるるり船しぐ川そふハ毛をまふはけありたハ
毛ふ利文世李ふそふハるる儀を結るべしなの川
さること李幾らへこ大勇よるるなりる面うはま

ぞうりゝ丈事ふるくらべ

○第九十二　あちむら

なるこぐく沖ふせぎあるあぢむら此もさく弱ぬ所ぐ数ぬ

あぢむら村と川もとあるを数ぬ所ぐ法こ事ありとぶぐ。

なれこの稀水色ぬ所弱てらあれこあさ徒例や

○第九十三　何ものこちかゝ

屋宍くあれ岩戸ぬ所ハあてちかゝおれそ蛾ーさ

神ぬざハ神事とあくあめハ天ぬもあ。多力雄ぬ

れいまこのちぐちをとぬ里まあち猪ふぐうれーさを

なれ

○第九十四　屋くさ村ぬ猪の鳥

屋くさ村ぬまこ石ぬ鳥をとり多ぬ鳥ぬてらぬ所ぬ烹をかり善ーて

一説矢形屋鳥ぬ所ぬ乃矢籠ぬ屋うよ梅のされて

るをいふ。一説屋形屋ぬ屋くさ村ぬ屋ねのぐらく梅とい

ふるをいふ。ぐれこをるるかくもぐ。まこ猪ハまこ経

自ふ鳥ぬなれ。其自ふかくハ志こ梅の鳥といふ

と此こ。宇陀野ハ大和なり。さてもハこれ立

とあくるり

○第九十五　あくぬ

あらてふ壷ハ海ぬ中ぬを見ぬ物を表ぬ人や何ぬる

百首ぬ中ぬ此ぬ中ハ今をう屋ぬ此事をこれ

見べー。海ぬ中ハこぐ屋ぬをいふ

○第九十六　今日此世ぬ

在ぬ今月此世ぬ中ぬ月くよあひこそ物あるぬ者ぬ

いしふみとハ奥州の名所なり。兼盛のせなかさぬを
ハ鳥の毛まてもかゝる布也。兼盛の歌といふ説ハ不
審。あけかくハみしかき事也。羽衣と申也といふハ
誤也。布説よし

○第九十七　小車の錦の紐

又ゆふに結ひたる小車の錦の紐ハときかぬものを
車を絞りのかさりにするものなり。逢不逢恋なり
紐とくとハ逢さる事なれハ。また後あひたく
わかれし心をゆるさぬまゝむすひたらんといふ也

○第九十八　まゆミしけき　鳩ふく

まゆミしけき山おのかみもしらすして鳩ふく秋の音まては迷
まゆミしけきとハ木草の枝なとまてしけりたる哉

姿のみえぬやうに額をかくす事也。さるおハ人め也とく
いやしき猟師をいふて薩摩ともいふ也。鳩ふくし
秋とハ秋のかくれのたくまを猟人かして
鹿をよするなる事。又ハ山ふかく入てあひたまた
るよしいへり。此歌の歌猟なる夏に名高かるへし
能く工夫して歌に合見給ふへしむつかしき歌也
此歌を能給ひて古人の心を知りさとるへし

○第九十九　わかれ草

ひくまのゝかやかなる思草まつさこ心なしとおもはまや
ひくまのハ遠江にありわかれ草二ところなし
とりかへる枕刈らん歌なかゆくに格さ心あさき
と刈出し侍るといふ事をしる人なし。想別

とる事ハ後ハおそくして自見れうさこハ一類
不審すてらもたのもしきを指ゲてこゆ
へなり先万葉の歌ハ天智天皇ハ第一花吳名
小蔦といり。此後をとちらんとも見ず古今小花
むうもとのおりひ事とあり。松花と蔦とハ松
なり事ありもてなの様ハ出るを花と
いへぬおれがかれもてきとハ花くべうすを
をんせいうされず天智の御時をいまさもれど
どもるべし。吉野殿院ハ第義ハ事ハ女
扇花　あれ方ハ花ゲの事ハ我たまふ
らバ松ハ咲ん。是ハ扇花をおもひ事とよみる
花詩や。又ハ扇花ハ若へ多なる事をめみまおる

志をんの流を用てや。此年ハ此ハ合ハ下事ハ
花を見ぬ花ハ咲きハ花ハ花ハ
花ハ御ゲ里ハ花の名ハ
とよめれば。なのめの花とハ花の事ハ
えてハ咲ハ咲んとあれど扇花とハみえず。
ハ咲ハ咲ハ咲ハ咲ハ咲ハ咲ハ
志ハ志をんハ蔦ハ蔦ハ
紫ハ咲ハ咲ハ咲ハ咲ハ咲ハ
定家ハ右伴ハ流ハ
の事とハ咲ハ咲ハ咲ハ
様をおりひ事とハ。此ハ咲ハ
ハ仲賢ハ梅ハ百首ハ

利。其和尚の方人をうをも初べき事よりなほ。家
ふあらうたき儀なるべし。自見れ人の師傅をう
ろしまする法をもれまくはふ義をつかうの。是
意地乃ものるきまはあらず。古語よ聖人道を紗
もるふなるべ秘して傳へんが為なりと云云

○卅百　　あ面れうこと

あふまきだあれれくこふ抽くこまれをろるもあるぬ者る
かくみとハかこうたなる利。さうふといふ事。ぬとをを
とふとあふじみ者ゆへやみををうふよハ栫をを
てあ方へとをやとあるて抽くこ。ぐ里れなる
ぬあうるみ者だをもうくに我と者とをろる
ふをひあるぐやと祈ぐひくをねぐひのうふるぬを

ううて此巻ふとる利ものあるなるべし。は詩斤思
とふ巻ふてをある。宗祇云とあをふくるよハあ
をうあるをあるうをのなり

○卅百一　みをすへさ番て

をあ面をこふみをすへさせて祈るを者ろ乞れ我よりうめや
此の根元なり。をうをこハ猿子なり。ををもへ
させてハみををすへさ番てなり。みをとハ酒やと
をとふをを酒なる利。されをうをもうくるよ仕く
差別を勧べし。酒をの む人れ分よハ風宴三寸
さけてあをうぬようる利て。三寸とまてみをとを
世をとふうを。又四巻をうくとを云。酒をみをとふ事
ハむうハ米をかみて化粕を実酒て酒よ

拾へ水酒をうるとゝのうりぬあぢ酒はうるの檜原とう
ばくるを世毋へなる。神(カミ)を水酒をまくべさせく
形ちを。えぐ云ハ我よりよる毋ゞをとうるゝの
なり。世ちとよハ中奇のあれを去るすよ反及

○才百二　岩(イハ)拾る丸水(スイ)

岩拾る丸水ハ泉蔵る三輪川乃清き流(セセ)の水をとれさやき
岩ふるハいちふ拾るゝなり。水ハ泉蔵(ミクラ)る八水乃湧(ワク)
蔵なり。世才一才二句めづゝ泉蔵なれを何
のちふし。あゝ引乃おぐこの名乃ゝびなの刑
いく度をとり用べゝ。又世水ハ泉れ世ハ分の字
を用れぢ毛ちふ水ハ泉方へ
泉(ヒタ)て蔵るゝ毋なれぢ。世流一理ありて拾ぐゝ。

又世なみハ川の流よ宣(タキ)なり。是もかゝびる
ゝ紀刑ゝり。名て優ぐゝ岩ふるゝ刑岩ふる
蔵ぐゝ文毛

○才百三　ちくめ

月ゝとあ毋ちて京乃夕霧よちくめふる衣さぬまぬ
世ゝ毋ゝ月夜ちゝといひる刑よ和れぢ良義(ヤウギ)
といふ乃刑。あ毋ちて京いぢの名ふゝも毋さ
和ぐれた。ゝ文毛をちふゝをなれぢいく度
をとり用べゝ。ちくめハちいさ紀弟ちたり義(ミ)分
ゝめをとる拾ゝやちくめるゝ毋ゝ流ゝ。
ちぬ毋ハをゝ毋ゝ。ちくめるゝ毋ゝ。
あさゝ小弟なれをさのを毋ゝ拾ゝ毋ゝ

ちるをすてゝいくハぬまゝにちり失れ。此新な
どゝめて今乃世のをゝきものゝ及ばぬる上に世をすぐしハ
ちれるゝ。此ものゝをはたゝくゝと吟味をるゝ古今集
の意乃部ふ　秋はぎ乃はちるを見て
あるぞめる夜ぞひぢ風はちりぬるとゝをかゝふ
して今雖乃奇に成せり。本新の歌の事をあを
野とかゝはたゝの事をはたゝめふなゝ。本ハ物ちの
家はさ毎をするを今なさ家ふあゝたなせりゝも
対を限りてあゝゝゝき極てよ本ゝとゝ利ゝふる
ゝこのやうゝを学ゝ人ゝ。ゝ毎ゝ世風情を思習
て藝古あるべき事肝要なり。秘をべゝく。
又遠ゝく須を学ゝのあを物ハあゝ家野とゝをて

物はゝふあゝを。されぞゝて夕露とハちゝれとれ
ゝふ人をゝをゝれど。そゝをハゝゝゝゝゝゝゝ。ゝ利
歌をすゝゝ月ゝ登をゝをあゝゝ毎ゝ物ゝ
をれゝゝろく本新乃ゝをゝゝくなゝ

○歌百四　ちゝゝ玉ゝゝ

いく歌孫ぬちゝ玉とゝする毎ゝゝ世演松ゝをふ雲系陶ゝを
白玉をゝするとハ彼世事。他見をひろふをゝひろ
拾ゝゝをいゝむ。見とゝいねゝをきなゝゝゝれゝ彼の事と
云云。ちゝくハ新羅國世名をハあゝゝを。紀列の名ふ
を。松葉をゝの紀列なり

太郎上

三十二終